

若者呼び込み、地域を活性化する

高梁市 吉備国際大学との「運命共同体」戦略

岡山県高梁市（石田芳生市長）は、深刻な若者流出という課題に直面する中、吉備国際大学（中瀬克己学長）と強固な連携を築き、先駆的な地域活性化モデルを開拓している。市は大学を単なる教育機関ではなく、地域と共に歩む「運命共同体」と捉え、財政をはじめとする多角的な支援と協働を継続。これは、地方自治体と私立大学の間で築かれる官学連携の新たな可能性を示すものである。この取り組みについて、高梁市企画財政部大学連携室の宮田勝士主幹と吉備国際大学の井勝久喜学長特命補佐に聞いた。

宮田主幹、井勝^{特命}補佐に聞く

○開学から続く「公私協力」の歴史
高梁市では、1881年に岡山県域では初の女子学校である順正女学校が開学した。その後、岡山県立高梁高等学校伊賀町分校となつた同校であるが、県による統廃合を迎えた。これで吉備国際大学を開学し、再び高梁市の強い要請を受け、公私協力方式で吉備国際大学を開学した。これは将来的な人口減少を見据え、地域の活性化を図るために一手でもあつた。市は大学設置の土地提供や補助金拠出などを行つていた。
最盛期には約4000人の学生が市内に在住し、高梁市民の要請により同校跡地に順正の名を冠した短期大学および専門学校を1966年に開設したのが、順正学園（当時は高梁学園）である。

し、その存在は市にも大きな影響を与えていたと。市は、学生達に地域住民と関わりを持つもらうことで、地域を好きになってもらい、学生と住民が一緒になって地域を活性化させることに重きを置いてきた。歴代市長も「大学と市は運命共同体」と公言し、大学側も「市の発展なくして大学の存続はあり得ない」と認識しており、大学の役割への深い理解が連携の根底にあると言える。その実効を担う大學連携室について、宮田主

り、高梁キャンパスに入

ど幅広い課題を協議します。この緊密な関係が、市の各課と大学の間で気軽に相談できる空気を作っていると言えます」。

地元にあるとはいっても、主に私立大学との連携のために設置された部署は、全国的に見ても珍しいと言えるだろう。

特筆すべきは手厚い財政支援である。

金制度を実施している。「市の年間予算の中で大学への支援は決して小さくありませんが、県立高校の存続に係る事業にも直面する中で、高校への補助金と同様に大学への支援も「地域の未来を支える投資」との認識が共有されています」と宮地連携・地域貢献活動��長の宮田勝士主幹(右)と特命補佐

触れ合う貴重な機会になつています。市外から入学した学生は市民の方々との日常的な交流を通して、高梁という地域が好きになつています」と井勝特命補佐は指摘する。

ユニークなのはオープニキャンパスである。

「高梁学生応援協力会（高梁商工会議所が中心に設立した地域の学生応援団）」が協力し、待機する保護者に向けて、市のPR活動や特産品の提供、さらには市内の名所巡り観光バスツアーを実施。街を挙げての歓迎で

生の力なくしては生活ができない」と期待を寄せているという。そして何よりも150年近く続く順正女学校への誇りと愛情が根底にあるのだ。

国公立大学に比べて私立大学への公的な支援が少ない中で、高梁市は吉備国際大学の存在意義を高く評価し、その継続的支援が市の発展に欠かせないと考えている。とはいっても、市の年間出生数は約80人という厳しい状況で、若者は仕事を求めて流出してしまう。留学生も思うように就職先が見

井勝特命補佐は次のとおりに言う。「自治体がどうを求めているのかを見抜くため、大学が持つ教育研究、人材の強みがその二つにどのように合致するかを具体的に提示することが重要です」。宮田主幹も「市民の健康づくり」と「大学のスポーツ社会学科の研究・教育」のように、十字学のシグズが合致する分野を見つけることが成功の鍵とも言えます。また、市長と学生が直接接

域に貢献している眞實的な事例を積極的に公表・アピールし、市民や行政にその価値を認識してもらうことも必要である。高梁市と吉備国際大学は、自治体と大学が「命共同体」として深く結びつき、互いの資源と強みを最大限に活かすこと、で、地域の持続可能な発展に貢献できることを示している。これは、少子高齢化と人口減少に悩む他の多くの地方都市についてこれから参考にすべきモルデルケースと言えるだろう。

〔2001年〕、主
幹にひき説明する

すための市と大学の協働
の正義ある。なる、同

市は市内の小中高生

もある。

市は、大学を単なる教育機関二つに分けて、一方が人的・財政的資源の供給者、一方がその受取者である。

源続的な連携を深めること

学する全ての学生に対し、年間20万円、4年間で合計80万円を返済不要で給付する制度の財源となつてゐる。これは大学の魅力を高め、より多くの学生を近隣から呼び込んでもらう、多岐にわたる地域活動に及んでいる。

田主幹。

が行われ、学生が地域と
深く関わっている。経済的
困窮家庭への食品配布、
高齢者施設での園芸療法、
女子サッカーチームの運営と地域活動、健
康づくり教室の開催など

ある。加えて、大学・パンフレットに市長のメッセージが掲載されていることは、特に保護者に安心感を与えていた。○自治体は大学をどう捉えているか

「市と本学が「人口少対策」のような具体的なテーマで、新しい価値の共創プロジェクトを立ち上げていくことが今後の課題です。これには

後、立派な減流する機会を設けることで、学生の意識を高めるとともに、行政側の大学への理解も深まります。このような日常的な交流の機会を、相手の信頼関係と継続して、



宮田勝士主幹(右)と井勝久喜学長
特命補佐